

優秀賞

『イスラエル兵役拒否者からの手紙』

ペレツ・ギドロ編著，田中好子訳

文学部 3年 大木夏子

紹介されるのは、パレスチナで軍務に服してきた兵士たちの叫びだ。侵略の戦争ではなく、自衛と平和のための戦争ならばやむを得ない。生き残るためには、人を殺さなければならない時もあるのだ。そう信じていた兵士たちの価値観は、軍務に服しているうちにもろくも崩れ去る。その結果、彼らは兵役拒否を告げる手紙をしたためた。

ここにまとめられているのは、兵役拒否を選んだイスラエル軍の兵士たちからの手紙約 40 通である。それぞれの手紙には、兵士たちが平和のための戦争と信じていたものが、罪なきパレスチナの民間人に対する殺戮へと変貌していく経緯が克明につづられている。彼らの手紙は淡々と紹介されていくが、その一つ一つからは、それぞれが抱える怒りや悲しみ、そしてこの上ない自責の念がにじみ出ている。ある兵士は、難民キャンプのパトロールという任務さえこなせばよいと考えていたが、結果的にそれが、石を投げてきた子供への追及や反発する人々への発砲へとつながったという。自衛は侵略へと変貌し、それによって兵士たちは良心を保てなくなっていくのだ。すべての手紙からは彼らが、この「汚い戦争」から手をひくために兵役拒否を選ぶまでの心理的状況が、如実に伝わってくる。

彼らの中には砲兵隊の隊長など、勇壮な響きを持つ肩書きの兵士もいる。しかしいくら読み進めていったところで、彼らの勇敢で目覚ましい活躍ぶり一つも見つからない。ここにまとめられている手紙のうち一通でも目を通せば、兵士たちの英雄のごとき姿など思い浮かべることもできないはずだ。代わりに浮かび上がってくるのは、追い求めていた平和を達成できず、むやみに手を汚した兵士たちの疲弊しきった姿だけである。

われわれ日本人にとって、イスラエルやパレスチナの紛争は遠い国の出来事でしかないだろう。しかし戦争とは国柄や人種の問題ではなく、人間という生き物ならばだれもが引き起こしうるものである。本書を読んでいると、手紙をしたためた兵役拒否者たちの心情が痛いほど伝わってきて、思わず戦慄することがしばしばある。そしてこう考えてしまう。もしも自分がイスラエルの兵士であれば、果たしてパレスチナの人々に銃を向けるだろうか。自分に石を投げてくるものがあれば、たとえ相手が子供でも発砲するのではないか。すべては自衛と平和のためなのだといい聞かせれば、何をしてもいいという気になるのではないか。

これまで耳にした戦争体験は、大半が被害者の視点から語られたものだった。しかしここにまとめられた手紙は、すべて加害者がつづったものである。そして読んでいくうちに自然と、加害者である彼らの心情に寄り添っている自分に気づき、驚愕することだろう。それは恐ろしいことのように思える。だが同時に、自分が戦争を起こすことも防ぐこともできる人間であることに思い至らせるといふ点で、優れた教訓をもたらしてくれる一冊なのだ。